

2024 年 7月17日

「アマチュア無線の魅力向上アイディア」提案書

1. 提案者
 - ・氏名：青山 雅則
 - ・年齢：
 - ・コールサイン（局免許保有者の場合）：JA7XKG（失効中）
 - ・連絡先 住 所：
 - メール：
2. 提案カテゴリー（AまたはBを選択）
 - A 既に開局している若者や初心者にとっての魅力を一層高めるアイディア
 - ☒ B アマチュア無線を知らない若者に興味を抱かせ資格取得を動機づけるアイディア
3. アイディア名：日本のアマチュア無線の先人たちの奮闘のドラマ化と、テレビやネット媒体での公開による、アマチュア無線への興味の喚起
4. アイディアの概要（200 字以内）：

日本におけるアマチュア無線の創世記から現代まで、多くの先輩諸氏の努力や苦
労、数々のドラマがあった（参考文献より）。そんな胸が熱くなる実話は世代を超え
て若者にも感動を与える。これを広く知らせることで、アマチュア無線の魅力を伝え
ることができる。そのため、実写ドラマを作成し、テレビやネットで放映・
配信することで多くの若者に伝える。役者にはハムの方（若い方や有名人）を起用す
る。
5. 詳細説明（図表を含めて 4 頁以内）：

書籍「ハムの世界」や「アマチュア無線の歩み 日本アマチュア無線連盟 50 年
史」には、日本のアマチュア無線の創生期に活躍された諸先輩方の波瀾万丈、悲喜
交々のエピソードが、生き生きと描かれています。以下にその例をいくつか挙げてみ
ます。

 - 1 矢木少年の出会い

大正 11 年（1922）、彼は出会ってしまった。その名は「ラジオ」。上野で行わ
れていた平和博覧会でラジオの公開実験が行われ、連日人々は釘付けになっていた。
その中にはいつも、一人の中学生の顔があった。「一体どんな仕組みになっているの
だろう。」そのうち「タベはよく聞こえましたよ。」と言っている人がいて、自分でも
作ってみようと奮闘。本を参考に組み立てたが、なかなか受信できない。いろいろや
ったがだめ。カッとしてつまみをぐいっと回したら、「トンツー トンツー」とモー
ルス信号が受信できた。それを頼りに調整し、ダイヤルを回すと、音楽が聞こえた。
それは上海の放送局であった。「バンザイ！聞こえる！」部屋を飛び出し、家族中に

触れ回った。

日本のハムの草分けの一人、矢木太郎さん（元 JARL 会長 exJ2GX、JH1WIX、故人）が自分でラジオを聞いた瞬間であった。

しばらくすると、その波長の近くで日本語での会話が聞こえ、今度は送信機を作ることになった。しかし、小遣いが尽きて、マイクが買えない。思い切って電話局に飛び込んだ。中古でももらえれば、と思っていたところ、運良く親切な方々で「よい実験をしてください」と、新品 2 個を提供してくれた。送信機が完成し、「大久保研究室」と命名、電波を出すのが、なかなか応えてくれない。数日後、「大久保研究室、こちら青鬼放送局。聞こえますか。」ようやく仲間と出会えた。

少々遅れ、関西でもアマチュアが誕生した。笠原功一さん、梶井謙一さん、井深大さん（ソニー創業者。世界のソニーも井深さんがアマチュア無線と関わっておられなかったら、どうなっていたろう）らが活動しておられた。この頃、中波でラジオ放送が始まったことから、アマチュアは短波へと移っていった。

しかし、関東と関西は、なかなかお互いに交信することがなかった。特に、関東は電波を出すことが違法であることを知っていたので、同じ顔ぶれで交信していた。

大正 15 年 3 月、東京の仙波猛さんと関西の谷川さんが交信に成功することで、関東と関西のアマチュアが「出会った」。

2 「JARL」 結成！ が…！！

関東と関西の雄志が集まり、外国にある、アマチュア無線連盟を作ろうと言うことになった。「JARL」は、当初英語の頭文字だったが、関東の仙波さんの提案で、エスペラント語表記になった。会の代表は、40 名弱の会なのに、「総裁」とした。連盟ができたことを、会員は電波に乗せて世界へ発信した。たちまち世界中に広がり、アメリカのハム雑誌「QST」にも、すぐ紹介された。その反響の大きさに「ようやく世界への仲間入りができた」と感慨にふけた。

が…。

「QST」が日本に輸入され、日本の逓信省の目にとまってしまった。「違法は取り締まらなければ。」

非合法で始めた日本のハムたちだが、合法化の努力は続けられていた。熱意に動かされたのか、昭和 2 年、私設無線電信電話実験局として、まず、8 局にコールサインが割り当てられ、晴れて電波が出せるようになった。

しかし、すんなりいかない人たちもいた。関西の笠原さんは、当時商科の学生（他は理工系だった）だったため、許可が 3 ヶ月遅れた。さらに、関東の矢木さんと多田さん、半田さん、杉田倭夫さんは当時浪人中で、出願すら蹴られてしまった。やむなくアンカバーを続けていたが、ある時、当局に踏み込まれ、4 人は検察から召喚された。担当の飯沼検事は怖い顔だったが、穏やかな方で、「電気は苦手だ。取り調べの前に、無線のことを判りやすく説明してくれないか。首謀者の矢木君、君やれ。」それから 2 日間にわたって、電波のみならず逓信省の対応等を詳細に説明した。飯沼検事の裁断は、「君たちの言い分もわかる点もあり、役所の対応も不十分な点があ

る。本件は却下する。ただし、法律を破ったのだから、親に出頭してもらい、十分監督するように注意する。真面目に実験を続けるように。逓信省に話しておいたので、すぐ出願するように。」親に雷をもらったが、出願は極めて丁寧に受理され、昭和4年10月、2ヶ月でスピード許可された。コールサインは半田（J1DM）杉田（J1DN）矢木（J1D0）多田（J1DP）と、連続コールであった。4人は、ようやく大手を振って電波を出すことができ、活躍していった。しかし…。

3 悲しみを乗り越えた第1号

サイレントキー。ハムたちは仲間の死をそう呼ぶ。昭和7年杉田倭夫さんが亡くなった。通夜で杉田宅のシャックに仲間が集まっていたところ、妹の千代乃さんがお茶を持ってきた。沈黙の中、千代乃さんを元気づけようと、矢木さんが「千代乃さん、アマチュア無線をやってみませんか。お兄さんの機械もあることだし。」しばらくして千代乃さんが「それが兄の遺志を継ぐことになれば」話は決まり、言い出しっぺの矢木さんが先生となって法規、工学、モールスなどを教えた。1年後、千代乃さんの試験が行われた。結果は見事合格。コールサインは「J1DN」。そう、逓信省の粋な計らいで亡き兄のコールサインを割り当てられた。初交信の相手はもちろん先生の矢木さん。その後、あちらこちらから「おめでとう」「よかった」と声がかかった。

4 長い冬の季節、ようやく訪れた春、戦禍も国境も越えて

この頃は、すでに戦争の影が迫っていた。ヨーロッパは戦火の中にあり、昭和15年にはアマチュア無線を禁止する国も急激に増加。そして昭和16年12月8日、太平洋戦争開戦。人民の生の声を伝えるアマチュア無線は、当局には都合が悪い。緘口令が敷かれることが多い。日本もこの日をもって一斉に無線機に封印され、全てのハム活動を禁止された。昭和20年8月15日、長い戦争は終わった。

昭和20年9月のある夜。寝付いて間もない矢木太郎さんは、しきりと玄関をたたく音に目を覚まされた。外国人の声で、「ミスター・ヤギ。タローはいるか。」と叫んでいる。玄関を開けると自動小銃を肩から提げた大男が見おろすように立っていた。「おまえはタローか」「僕はタローだが、あなたは？」「俺はジュリアス、以前何回もラグチューしたW6DVSだよ。」「なに、W6DVS、そうか、お前がジュリアスカ」二人は肩を抱き合ってお互いの無事を喜び合った。聞けば空軍の崇信部隊に所属し、設備設営のため終戦と共に厚木飛行場に来ていた。日本に行く機会があったら一番親しかったJ2GX（元J1D0）の安否を確かめたい、とQSLカードやコールブックの該当ページを持って、来日し、任務が完了すると、帰国を伸ばして捜し始めた。困難を極めたが、やっとの思いでたどり着いたのであった。「ハムの友情は素晴らしい。アマチュア無線をやっていて本当によかった」そうしみじみ思った。ハムの友情は国境を越え、戦争でも死ななかった。日本のハムたちは、再び活動を開始するが、なかなか許可が下りない。ようやく昭和27年に再開した。

5 日本初、そして、世界記録

昭和31年、高校生ハムのJA1AEW根岸さんは、日本で初めて50メガヘルツでオーストラリアとの交信に成功する。このとき、JA6FR大島さんもVK4NGをキャッチしていたが、交信はできなかった。その後も様々な努力を重ね、南米と思われる局を受信したりもしたが、交信には至らなかった。自信を失いかけたとき、LU9MAの交信が聞こえた。大島さんは、声の限り呼びかけたところ遂に応答があった。「JA6FR、こちらはLU9MA、アルゼンチン・ブエノスアイレス、これは、世界最長距離交信のレコードですよ！」せめて日本記録更新を、と念願していた大島さんにとって、ビックリする一言でした。その後、昭和33年、ブラジルのPY3BWと交信、世界最長距離をマークし、長らく日本のアマチュア無線界が持つ、ただ1つの世界記録であった。(昭和56年に徳島のJA5HTP・山野さんによって更新)

このように、日本のハムの先人たちは、数々の困難を乗り越え、趣味の王様とも言われるアマチュア無線を発展させてくれました。これらの話をドラマとして若い人に見てもらえれば、興味を持ってアマチュア無線をしてみたいという人が増えるのではないのでしょうか。

テレビドラマ業界では、ネット配信で収益が上がるので、良質な素材を求めているとの報道を目にしました。であれば、魅力的な素材であれば、お金をあまり出さなくても制作できるのではないかと考えます。

現在のテレビ局の役員・経営者・技術者の世代は、アマチュア無線黄金期に青春を過ごした世代であり、アマチュア無線がきっかけでメディア業界に携わった人も多いのではないかと考えます。そんな方々に熱い思いを伝えれば、アマチュア無線の発展に力を貸そうと思う方もきっと多くいらっしゃるのではないかと考えます。以上の点を考慮すると、それほど多くの費用をかけずともドラマが作成でき、また、興味を示してくれるメディア関係者もいらっしゃるのではないかと考えます。

前述のソニー創業者、井深大さんだけでなく、矢木太郎さんも東京芝浦電機（現東芝）で音響製作部長を歴任されたり、アマチュア無線で培われた技術や情熱は、現在のスマホや無線を利用した様々な技術とも大きくつながっていると考えます。

また、ドラマ化にあたり、ハムの著名人、役者さん、またはアマチュア無線をしてみたいと思っている若手俳優・芸能人を起用することで、話題を喚起し、多くのメディアに取り上げてもらえるきっかけになるのではないかと考えます。

アマチュア無線のこれからの持続的な発展のために、本アイデアをご検討いただければ幸いです。

6. 参考情報（任意）

- ・参考資料：ハムの世界－電波にかける情熱（CQ出版社）

アマチュア無線の歩み 日本アマチュア無線連盟 50 年史（CQ 出版社）

- ・参考 WebURL 6m DX Record (big.or.jp)